

中国人民大学訪日団第7陣との 神奈川大学交流会に参加しました

外国語学部 中国語学科3年 林 日倩
外国語学部 中国語学科3年 佐藤麻鈴

■2013年10月30日午後2時ごろ、中国人民大学が神奈川大学にやってきました。

場所は1号館8階の会議室で行われ、中国人民大学は全部で64人、パッと見は女子学生のほうが多かったです。みんなスーツを着ていました。後でどうしてかと聞くと、分からないと言っていました。きっと今日のために正装したのだと思うことにしました。

神奈川大学の学生は外国語学部、人間科学部、法学部、工学部、経済学部、の5学部を含めて49人参加しました。神奈川大学の中には飛び入り参加の人もいて、より多くの学生が交流を楽しんでいました。式の初めに神奈川大学の鈴木陽一副学長による歓迎の挨拶があり、次に訪日団団長の劉子敬様による挨拶があり、このイベントが始まったのです。

先生方のあいさつが終わったあと、あらかじめ中国の大学生と日本の大学生をそれぞれ6〜8人のグループに分けたので、教室を移動して、お菓

子をつまみながらの交流会が始まりました。まずはお互いの自己紹介から始まり（もちろん中国語での自己紹介です！）、そのあと2対1あるいは1対1で質問会が始まりました。お互い相手に聞きたいことがたくさんあったようです。中国側の大学生のほとんどは日本語ができず、ゆっくり発音したり、紙に漢字を書いたり、身振り手振りで伝えたいことを教えてくれました。日本の大学生は一生懸命相手が何を言いたいのかを聞き取るうとしていましたが、やはり言語の壁は厚いですね（実際、本当に中国語がわからない学生は英語で会話していました。はい。万国共通語です）。中国の女子大学生からの一番多い質問が化粧品メーカーについてでした。うん。乙女ですね。ここは無難の資生堂と答えました。中国でも資生堂は値段が高いそうです。そして、一番いい靴下のメーカーは何かまで聞かれました。：なんでしょうかね。ユニクロだと思いましたが、どうなんでしょううか。また、日本の学生は冬でもミニスカ

トをはいていて寒くはないのかと聞かれました。寒いですが。寒いに決まっています。しかし、オシャレは我慢です！と中国語で答えられませんでした。無念。今度聞かれたら答えられるように、今から答えを考えておかなくてはならないですね。

そんなこんなで、あつという間に15時半になり、中国の大学生が発する時刻になりました。まず一はずつ順番に一階におり、全員が1号館の玄関に集まって、記念撮影をしました。撮影が終わってすぐに、中国の大学生はバスに乗り込もうとしました。そのとき私と同じ班の中国の大学生は中国からのお土産をくれました。それは「中国結」というものです。これは中国民間手芸の一つで、ひもで結ったものです。中国の定番のお土産ですね！左の写真がそうです。

こうして、中国の大学生みんながバスに乗り、大学からバスが発しました。2時間はあつという間でした。もつとお話があったなと思いましたが。人生は一期一会といいますが、いつかまた

逢えたらいいなと思いました。

(林日倩)



■意思疎通をおこなうのが本当に難しかったです。中国語学科に所属しておきながら、中国人大学生が何を話しているのかほぼ分からず、文字に起こしてもらっても結局時間がかかるのでスムーズなやり取りができず…もう少し真面目に勉強しとくのだったと後悔が残りました。

1人デザイン科に所属している中国人大学生がいました。ちょうど私も絵を描くのが好きなので、これは交流するチャンスだと思い絵を描くことを提案しました。しかし、やはり、どの国の人であろうが、絵を描くことが好きでも人に絵を見せることは恥ずかしいようです。なかなか描いてくれません。おまけに、周りの中国人大学生

が、「お題を決めて一緒に描けばいいのではないか」と言ってきました。絵を描く人なら分かると思うのですが、お題を決めて描くなんて自分の絵のレベルが露骨にばれてしまいます。大抵絵を見せるのを恥ずかしがる人は、自分のレベルが低いと自覚しているか、見せたいけど自信があるように見られるのが照れくさいからであるように思います。私もだいたいぶ気恥ずかしかったのですが、ここは積極性を見せなければと気合を入れました。

お題は「女の子」でした。ボールペンで一心不乱に女の子を描きました。どんな絵を描いたところで「うわ：コイツ絵下手だな」と思われたりしないだろうと思いつまみましたが、「私の方が上手いわ」とけなされても構わないと心に決めました。その熱意が伝わったのか、相手の中国人大学生もシャーペンを動かし始めました。共にペンを進めるこの様は、この交流会の主旨である「言葉に頼らない交流」をよく体现できていたことでしょう。

誰よりも早く描きあげたのは、私の友達でありこの記事の最初の部分を担当した林日倩さん(林ちゃん)でした。完成した絵は、誰もが可愛いと溜息を漏らすほどのプリティさを兼ね備えています。

さすが林ちゃんです。私は女の子を描くことを



(林ちゃん絵 イメージ図)

やめ、おもむろにイカの絵を描き始めました。私にとってはお題などどうでもよかったのです。周りの中国人大学生が「いきなりどうしたんだ?」と不思議そうな顔で見えます。しかし、それすらも気にせずイカの絵を描き続けました。

気付けば交流会は終了時間が迫ってきていて、さつきまで絵を描いていた中国人大学生は荷物をもとめていました。言葉に頼らない交流をして分かったことは、あまりに言葉に頼らなすぎると会話が途絶えるということです。実際、名前を聞きそびれました。別れ際、中国人大学生の皆さんが笑顔で手を振ってくれました。あの笑顔に見合うだけの交流ができたか定かではありませんが、とても楽しい交流会だったことは一生心に残り続けるでしょう。

(佐藤麻鈴)